

川越城(河越城, 初雁城, 霧隠城) (埼玉県史跡, 百名城)

川越市郭町 2-13-1) (川越市立美術館等)

川越城(かわごえじょう)は、埼玉県川越市にあった日本の城。江戸時代には川越藩の藩庁が置かれた。別名、初雁城、霧隠城。関東七名城・日本 100 名城。通常、川越城の名称を表記する場合、中世については河越城、近世以降は川越城と表記されることが多い。

概要

武蔵野台地の北東端に位置する平山城。1848 年(嘉永元年)に建られた本丸御殿の一部が現存する(埼玉県有形文化財)。二の丸跡は川越市立博物館・川越市立美術館となっている。三の丸跡地である埼玉県立川越高等学校の近くに小高い富士見櫓跡があり御嶽神社と浅間神社が建っている。川越城には天守はなく、宇都宮城・清明台櫓と同様に城の中で一番高い所にあった富士見櫓が天守の代わりをしていた。富士見櫓は三層と考えられている。埼玉県指定史跡。中世から近世にかけて改築がなされ規模を大きく変えた。藩政時代には、酒井忠勝・松平信綱(知恵伊豆)や柳沢吉保など幕府の要職についた歴代藩主が多く(幕閣の老中数 7 名は全国でも最多の藩の 1 つ)、特に江戸時代中期までは「老中の居城」であった(中期以降は親藩)。

別名

・ 初雁城

- 城内の三芳野神社に「初雁の杉」があった。毎年同じ時期に北から初雁が飛来し杉の真上で三声鳴き三度回って南に飛び去った、という故事による。太田道灌が川越城築城祝いで開いた宴の折も初雁が来て鳴いたことから道灌が「初雁城」と命名したとされる。3 代目の初雁の杉が神社の社殿裏にある。

・ 霧隠城

- 城内に「霧吹きの井戸」という井戸があり、普段は蓋をしておくが危急の際は蓋を開くと霧が城を隠したという伝承による。井戸は移築され、現在は市立博物館の前庭にある。

歴史・沿革

室町時代

- 1457 年(長祿元年) 武蔵国は扇谷上杉氏と古河公方(足利氏)の係争地であったため、足利氏の勢力(古河城や関宿城・忍城など)に対抗する上杉氏の本拠地として、上杉持朝は家宰の太田道真、太田道灌父子に川越城(河越城)の築城を命じた。また江戸城も築城させ、古河公方への防衛線を構築した。持朝が初代河越城主となった(家老の道灌が江戸城主となった)。
- 道灌の築城方法は、「道灌がかり」という「連郭式縄張り」で、子城、中城、外城など独立した曲輪を連ね、周囲に高さ二間ほどの土塁を築く。曲輪の間には堀を巡らし、飛橋と呼ばれる橋で連結、各入口には土橋、引き橋、食い違い虎口や横矢がかりなどの仕掛けを作った。敵が侵入しても中城に拠って防げる構造だった。城郭はおよそ 5 万坪、8 門 8 櫓を構えた。新編武蔵風土記稿によると本丸南西の 20m の高台に富士見櫓を築いたのも道灌である。また三芳野神社が祀られた天神郭も造られた。城の北に赤間川(現新河岸川)が流れ、さらに北を入間川・越辺川などが流れて外堀の役割を果たす。城の南は遊女川(よながわ)の湿地帯であった。武蔵野台地の北端の丘陵に位置し、東方を睨んだ自然の要害に位置している比高 5~6m の平山城である。
- 築城に際しては、太田道真主導説(北条五代記や永享記など)と太田道灌主導説(霊岩夜話や太田家記など)の 2 説ある。築城後、西に太田道真屋敷が、城の北西に太田道灌屋敷が築かれた。

- ・ 扇谷上杉氏の当主・上杉朝良が居城する河越城に対抗して、1497年（明応6年）に山内上杉氏当主・上杉顕定は河越館に上戸陣を構築、古河公方の足利政氏を招いて7年間も睨みあう。
- ・ 北条早雲の継嗣・北条氏綱は武蔵国征圧のため、武蔵国を支配していた上杉氏の居城・河越城に侵攻、1524年（大永4年）から1544年（天文13年）まで4度にわたる争奪戦が展開される（総じて「河越城の戦い」という）。
 - 上杉時代の城主：上杉持朝、上杉政真、上杉定正、上杉朝良、上杉朝興、上杉朝定
- ・ 1524年（大永4年）に江戸城を収めた北条氏綱は、1537年（天文6年）について河越城を奪取し武蔵国支配を確定、以降は後北条氏の武蔵国支配の拠点となる。とくに「河越衆」と呼ばれ、大道寺氏の精鋭部隊がいた。
- ・ 1546年（天文15年）河越城奪回をはかる扇谷上杉氏の上杉朝定は、古河公方（足利晴氏）・山内上杉氏（上杉憲政）と連合を組み、大軍で河越城を包囲し後北条氏との決戦に臨んだ。また今川義元、武田信玄と連携し駿河と武蔵でほぼ同時に後北条氏に対する軍事行動に出ることで圧迫を強めた（第2次河東一乱）。「黄八幡」で有名な北条綱成は半年に及ぶ籠城で抵抗、ついに後攻めの北条氏康による夜襲で連合軍を撃退、扇谷上杉氏は滅亡、山内上杉氏はのちに長尾景虎のもとに逃亡することになった。これが日本三大夜戦の一つ・河越夜戦である。
 - 後北条時代の城主：北条氏綱、北条氏康、北条氏政、城代：北条綱成、大道寺盛昌、大道寺重興、大道寺政繁、大道寺直繁、大道寺直英
- ・ 後北条氏は河越城を手に入れると大幅な修繕を実施、特に大道寺政繁は三の丸と八幡郭の拡張を行い、西方面への防備が強化された。

安土桃山時代

- ・ 1590年（天正18年）豊臣秀吉による小田原征伐では、河越城を守っていた後北条氏の宿老の大道寺政繁は上野国まで出陣して迎え撃つが降伏、前田利家の軍勢は河越城に入城した。
- ・ 徳川家康が関東に封ぜられたのに伴い徳川氏譜代筆頭の酒井重忠が1万石をもって川越に封ぜられ、川越藩が立藩した。
 - 川越藩立藩以後の川越城主は、酒井家→酒井家→堀田家→大河内松平家→柳沢家→秋元家→越前松平家→松井松平家と推移した（詳しくは川越藩を参照のこと）

江戸時代

川越藩で最大の石高を領したのは越前松平家の17万石である。江戸時代には川越城を中心に城下町が形成され、小江戸と称された。城下は武蔵国の商工農の中心、物資の集散地として栄えた。商品は新河岸川を通して江戸に運ばれた。川越街道は川越藩主の参勤交代や、川越藩の分領の上野国前橋との連絡で重要な役割を果たした。

- ・ 1653年（承応2年）大河内松平家・松平信綱（知恵伊豆）により、大拡張工事がなされ寛文年間に完成し、倍の規模の近代的城郭になった。
- ・ 中郭、追手郭（あわせて外郭）、北東に新郭、東に帯郭、南に田郭が付加された。川越城は、本丸、二の丸、三の丸や八幡郭、外郭、田郭、新郭などの曲輪、本丸の富士見櫓（南西隅）と虎櫓（北西隅）、二の丸の二重の菱櫓という4つの櫓、西大手、南天手、一、二、三、天神、蓮池、中、清水、田郭、帯郭、新郭、埋の13の門からなり、土塁・水堀を張り巡らした総面積が9万8千坪（約326,000㎡）余りの規模をもつ城郭となった。天守の代用となった富士見櫓は、基壇の高さ51尺（15.4m）、櫓の高さも51尺（15.4m）である。信綱による修築以前の姿は、国立歴史民俗博物館の「江戸図屏風」に残っている。城主の住居は焼失するまで二の丸にあり、二の丸には武具方役所もあった。隠居屋敷は三の丸にあり、三の丸南には馬場と馬見所が設けられた。家老屋敷は外郭に配された。新郭には米蔵や火薬庫があった。

- 1848 年（嘉永元年） 越前松平家・松平斉典により、本丸御殿の造営が行われる。二の丸にあった御殿が 1846 年（弘化 3 年） 焼失し、再建したもので、これが現存する御殿である。

近現代

- 1868 年（明治元年） 松井松平家・松平康英が明治政府に恭順の意を示すため、堀を埋める。
- 1869 年（明治 2 年） 川越藩が新政府に川越城の老朽化した建物を取り壊したい旨を届け出、城の部分的取り壊しが始まる。
- 1873 年（明治 6 年） 廃城令に伴い、川越城内の不用・破損の建物等の入札・売払が行われる。
- 1924 年（大正 13 年） 川越城跡が埼玉県指定史跡に指定される。
- 1967 年（昭和 42 年） 本丸御殿が県指定有形文化財に指定される。
- 2006 年（平成 18 年）4 月 6 日、日本 100 名城（19 番）に選定された。

遺構

現在、城址の大部分は市街地となっており、往時の姿を想像するのは難しいが、本丸御殿の一部（大広間と玄関）が現存している事は特筆に値する。本丸御殿大広間が現存しているのは、日本では川越城の他には高知城のみで、貴重な遺構である。

本丸御殿南側には富士見櫓跡が残っており、郭町 1 丁目付近の住宅の裏には中ノ門付近の堀跡が現存しており、2008 年（平成 20 年）より川越市による公園整備で堀や門の復元が行われた。中ノ門堀は西大手門側から本丸方向への敵の進入を阻むために巧みに配された堀のひとつであり松平信綱によって造られたものである。

川越城本丸御殿

本丸御殿は、1848 年（嘉永元年）、松平斉典の 17 万石時代に建てられた入母屋造りで、豪壮な大唐破風と霧除けのついた間口 19 間・奥行 5 間の大玄関・車寄せをもつ。36 畳の大広間は、板間で玄関と区切られ、さおべり天井で奥行 3 間の座敷には 9 尺の廊下が四方を囲っている。建坪は 165 坪である。

当時は 16 棟、1025 坪の規模をもっていた。明治に入ると廃城令で多くの建物は解体され、現在残る建物は玄関・大広間部分と家老詰所のみとなっているが、本丸御殿大広間は川越城の他には高知城にしか現存せず、全国的に見ても貴重な遺構である。玄関・大広間部分は入間県県庁、入間郡公会所、更には煙草専売局淀橋支局川越分工場へと転用され、1933 年（昭和 8 年）には川越武道奨励会の修練道場となり、名称も初雁武徳殿に変更、戦後は川越市立第二中学校（現在は初雁中学校）の校舎や屋内運動場として使用されていたが、1967 年（昭和 42 年）、県指定有形文化財に指定された。家老詰所については、解体後上福岡市（現：ふじみ野市）の民家に移築されていたのを再度移築したものであり、位置は以前とは異なっている。こちらも 1991 年（平成 3 年）に県指定有形文化財に追加指定された。2008 年（平成 20 年）10 月から 2011 年（平成 23 年）3 月まで保存修理工事が行われた。

富士見櫓跡

三の丸跡地である埼玉県立川越高等学校南側の小高い丘が城内で最も高い位置にあたり、この地に三層の富士見櫓があった^[5]。川越城には天守はなく、宇都宮城の清明台櫓と同様に富士見櫓が天守の代わりとなっていた。正確な規模は不明だが江戸末期の慶応 2 年（1866 年）に川越城を測量した時の記録によれば、長さ八間三尺（約 15 メートル）、横八間（約 14 メートル）あったと記されている。富士見櫓の名前の由来は、文字通り富士山を望めたためである。現在は浅間神社と御嶽神社が建っている。

その他の遺構

これ以外にも本丸を囲む土塁や水堀跡が確認できる。市内三久保町の成田山旧客殿、加須市むさしの村武芸館、東松山市葛袋民家の門計 3 棟が移築されていることが市立博物館発行の資料にあるが、加須市のは取り壊されて現存しない。東松山市葛袋民家の門は川越城の裏門を移築した二層の長屋門のものといわれ、間口十四間、奥行き三間半、扉部が二間半の規模を持つ。川越城の移築門とされるのは、扉の天井

部分等に今でも朱の跡が残されているためであり、城門由来の部材は扉のみである。また、川越市立博物館には川越城のものと言われる扉が保存されている（非公開）。

西大手門跡は川越市役所前に、本丸門跡は初雁球場近くに、田曲輪門跡は富士見櫓近くに、南大手門跡は第一小学校西門近辺にある。南大手門の馬出しからの道がかつての城内の路の名残を留めている。南大手門近くの「永島家住宅」は武家屋敷跡で、埼玉県内に残る江戸時代の武家屋敷の遺構はここだけである。川越では藩命で武家屋敷の生垣はカラタチと決められており美しい家並を形成、永島家住宅の生垣もカラタチである。また市内にある榮林寺の山門は二の丸の蓮池門を移築したものという。

江戸城遺構

江戸城にあった建物は川越に最も現存している。川越城近くには天海僧正ゆかりの喜多院がある。幕府の庇護が篤く1638年（寛永15年）の川越大火で焼失すると3代将軍徳川家光の命で江戸城の建物が移築された。客殿には徳川家光誕生の間と言われている部屋があり、家光の乳母春日局の間を含む書院、庫裏も移築されている（全て国の重要文化財）。初期の江戸城の御殿建築と末期の（川越城）御殿建築を比較するうえで両者とも貴重な遺構である。

市内の氷川神社には1637年（寛永14年）に家光が江戸城二の丸に建立した東照宮が移築されている。江戸城内の宗教的建造物としては現存する唯一のものである。

城下町の町割

老中首座で「知恵伊豆」と呼ばれた松平信綱によって形作られた川越の町割は、「十ヵ町四門前町」（じっかちょうしもんぜんまち）に郷分・城付を設けた合理的なもので、三方を低地と河川で囲まれた防衛に最適な台地の形状に合せて城と城下町が配置された。台地の北端に城と、その本丸の北側に総鎮守の氷川神社が置かれた。表玄関である西大手門の前は伝馬問屋の置かれた江戸町で、そこを基点に南方に川越街道が江戸まで伸びた。西大手門から西へ進む先には高札場である「札の辻」が設けられた。ここを軸に縦二十三条、横七十八条の概ね碁盤の目状に町割がなされた。また、袋小路・鉤の手・七曲り・丁字路など城下町特有の街路が作られた。札の辻を中心とした一帯が城下の商人地区である上五ヶ町である。その目抜き通りが今日では蔵造りで有名な「一番街」である。町屋は概ね間口数間、奥行15間から20間の短冊型に区切られた。上五ヶ町に隣接して時の鐘も建つ職人町の下五ヶ町があった。ここまでが町奉行の管轄であった。一番街のさらに西側には養寿院、蓮馨寺、行伝寺、妙養寺が4つの門前町を形成した。町火消しはここまで担当した。本丸の周囲には内堀が張り巡らされ、その南側に武家屋敷が建ち並んだ。家老屋敷などは南大手門周辺に、下級藩士は、川越街道の入口近くの組屋敷に住まわされた。そのさらに南側は江戸幕府の直営社であった喜多院や仙波東照宮が広大な寺領を構えた。これは軍事的配置でもあった。その南方には川越の外港である川越五河岸が設けられ、大きな物資は船でしか運べなかった時代の川越の物流拠点であった。

上五ヶ町

- 江戸町（えどまち）：川越街道の基点があった。人馬継ぎ立てをする問屋や蔵米の点検をする改があった。
- 本町（ほんまち）：西大手門から札の辻に至る大通り地区。
- 南町（みなみまち）：札の辻の南。大店の呉服問屋が連なり隆盛した地区。蔵造りで有名な現在の川越一番街。
- 喜多町（北町。きたまち）：札の辻から北にある。河越夜戦の舞台となった東明寺の門前町だった。
- 高澤町（たかざわまち）：札の辻から西へ高澤橋までの区域。江戸時代は特産品のそうめんを作る店を軒を連ねた。菓子製造の家も多く「菓子屋横丁」として現存している。

下五ヶ町

- 鍛冶町（かじまち）：北条氏が相模から鍛冶職を移住させ鍛冶の町となった。

